

談話室

小布施の「まちづくり」 新たな交流を目指して

今年は穏やかな気候の10月である。町を歩く来訪者もことのほか多く、秋の日を一杯に浴びながら散策されている。

小布施町は、長野県の北の外れにある面積19.07平方キロの、県で一番小さな町である。そこに12千人の人が暮らす。来訪者も多く、年に人口の100倍もの方に訪れて頂き、賑わいを見せている。

江戸時代中期から幕末にかけては、「交易農業」と「六斎市」の発展で、北信濃の経済的中心ともなったこの町は、農業を兼ねた商人たちが文化の醸成にも力を尽くし、サロンを形成して全国から文人墨客を招いた。その客人の一人が、最晩年の葛飾北斎である。経済の小繁栄の上に独自の小文化を育てた、謂わばこの町の「ベル・エポック」である。

明治期に入り、町の勢いは急速に衰える。来訪者は減り、その時々の商品農作物を中心とする農業はそれなりに元気だったが、北信濃の寒村になっていった。

35～36年前から、所謂「まちづくり」によって町は「賑わい」と「元気」を少しずつ取り戻してきた。理由は5つほどある。1つ目は、「人口政策」である。昭和40年代初めから、高度成長によって、若者が都会へどんどん流出して、9.5千人を割りそうになった。町は開発公社を作り、宅地造成販売を行い、これが奏功し、2千人ほどの新しい住民を迎えた。

公社には若干の基金も残った。この基金を元に、町に残る北斎の肉筆画を一堂に集めた「北斎館」を開館した。昭和51年のことである。当時、地方美術館は珍しく、しかもこの田舎に何故、北斎の肉筆画が沢山あるのか、と、マスコミが注目し「田んぼの中の美術館」と若干の揶揄も含めて報道された。以来、この小さく無名な町が世間の耳目を集め来訪者のつとに増えるまちに変貌する。2つ目の理由である。

3つ目は、地場産業の「栗菓子店」の活躍である。幕末から明治初年に当地銘産の栗を加工、販売する会社として8社ほどが発足した。しかし、町の衰退期にあって小売は難しく、全国の有名旅館やデパートへの卸営業に専心していたが、北斎館開館前後から、店頭販売にも力を注ぎ始めた。永年の経営蓄積から、店舗、空間設計、飲食のメニュー構成、サービスに至るまで全国レベル以上の水準で構築され、来訪者の期待に応えた。

4つ目は「町並み修景事業」である。この頃（昭和50年代末）は、北斎館周辺はまだ畑が多く、町は点と線で結ばれる状態であった。おりしも、町は北斎館

の近くに、北斎を小布施に招いた郷土の先達、高井鴻山の旧宅を改装して、「鴻山記念館」の開館を予定していた。美術館、記念館を結ぶ点の整備ではなく、付近の地権者も一緒になって住空間の快適性も含めた面的整備にしようとする町を含む五者が集い、二年の歳月をかけて議論し、さらに三年の時間を費やして、16千平米を修景、整備した。これが「保存」とも「再開発」とも違う「町並み修景事業」であり、考え方、システムの組み方が新しいと外部から一定の評価を頂いた。これを契機に町民の景観に対する意識は高まり、「外はみんなのもの」なる理念が醸成されてきた。景観意識の高まりとともに、各家庭では、日常生活に「花」を取り入れ豊かな生活空間を形成し、ライフスタイルの向上に務め、日々花との生活を楽しむ家が増えてきた。

5つ目の理由は「花のまちづくり」である。丹精こめた庭を来訪者にもご覧頂き、花を媒介にした新しい交流をも目指して、8年前からは自宅の庭を開放する「オープンガーデン」が始まり、現在100件を超えるお宅が庭を開放している。そこでは時に、しつらわれた庭での「もてなし、ふるまい」があり、失われつつある「心の交流」が全国の方と生まれている。

これら、5つの主たる「まちづくり」の経緯が、単独であるいは複合され、情報発信しながら、今に至っている。

町は「まちづくりの第二ステージ」に入った。平成16年2月、町民は「合併しないで、自立を目指す町」を選択した。「三位一体改革」という名の地方いじめの只中である。先行投資のインフラ整備などで地方債の残高も多く、財政は苦しい。が、町民は元気である。

「協働のまちづくり」でともに汗を流し、外部の学識者と内部の知恵を融合し、新しい価値を作り出し、農、工、商、サービス業が一体となった産業も動き始めている。

さらには、町の中心部に集まる来訪者を町中に回って頂くシステムの構築である。町周辺の農村地帯は、都市計画の「線引き」に守られて、実に美しい。小布施への来訪者は、「なつかしい、ほっとする、やすらぐ、いやされる」ことを求めてお出でになる。小さな町だ。

農村部へはすぐに足を運べる。オープンガーデン、民泊、農村レストラン等がその拠点となる。交流が生まれ、信頼感が育ち、最終的には農村ビジネスとなる。実際、町北部地域では4つある農業活性化団体が一つになり、大きな動きになってきた。そこには、農村では珍しい広場があり、花苗の生産拠点があり、最近評判の高いワイナリーもある。地域住民の士気も高く「新しい農村モデル」の一つになるかもしれない。

小布施町は常に新しい試みに挑戦していく町と自負している。

(小布施町長 市村良三・いちむらりょうぞう)